

■入賞 河部 眞弓（かわべ まゆみ）さん・六十一歳／島根県江津市在住

大分県出身。アルバイトから正社員を経てフリーのプランナーへ。四十代で夫の実家である島根県に移住。田舎暮らしの素晴らしさに衝撃を受けNPO理事長として地域活動に従事。六十代を前にNPOを解散。

還暦ラプソディ

六十歳直前、私は毎日号泣していた。

それまで島根県の過疎地で地域活動に従事していたが、そろそろ私のお役目も終わりと、NPOを解散。少し早いがりタイアを決め、愛犬とのんびりとした日々を送るつもりだった。夫は年下のため現役で、まだしばらくバリバリと働いてくれるはず。

と、余裕こいていたのも束の間、まだ七歳の愛犬が突然死した。なぜ？どうして？あんなに元気だったのに。私のせいだ。バカバカバカ！自責、後悔、呆然そして号泣と典型的なペットロス症候群に陥った。

そして号泣のまま半年が経った頃、コンビニの自動扉の向こう、ギョッ山姥が！それが自分だと気がついた時は愕然とした。この半年、自分の姿など見た事もなかった。恐る恐る鏡を覗くと、肌も髪も何もかもがボロボロの悲惨な状況。これぞ老醜…。

こんな事ではいけない。なんとかしなければ！

そこで私は一念発起し「若返り大作戦」を練り広げる事とした。美容やお洒落には疎かったが、徹底的に情報収集し、百均の化粧水は一万円以上する高級品に変更。パックやマッサージ、美容機器など良さそうなのは即トライ。が、それ

にしても効果は見えないし面倒くさい。

もうすぐ六十歳なのに、残り少ない貴重な資源（時間×お金×情熱）をこんな事につき込んでいる場合か？もっとやる事があるのではないか？死に向かう人生において若返りに命かけるって、おかしくないか。

ある日はプチンとキレタ！

あくばかばかしい。時がたてば老いるのは当たり前。それを若返ろうと執着すること自体が老醜ではないか。やめたやめた。

そして「若作りのオバさん」から一足飛びに「可愛いお婆さん」を目指す事とした。まずは髪を染めるのをやめた。いざやってみるとベリーショート 그레이ヘアは意外に似合った。ステキ！と周りの評判も良かった。

とはいえ、こんな事くらいではペットロスは克服できない。見かねた夫が、ある日「山陰柴犬」の記事を見せてくれた。山陰柴犬？聞いたことがない。でも柴犬といえば、国の天然記念物で、世界的にも人気が高い。その柴犬に「山陰」を冠した犬がいるとは。「地ビールは作れても地犬は作れない」これってもしかして、すごい地域資源かも？

私は大好きではあるが犬バカではない。でも地域振興バカ

である。この山陰柴犬が世界的に知られば、山陰も世界的に！そんな妄想をするのが地域振興バカである。この犬は約四百頭の希少種で、飼うにも順番待ちとの事。今すぐに犬を飼う気にはなれないが、それならばとエントリーした。

そして六十歳を迎えた年の暮れ、我が家に子犬がやってきた。いざ山陰柴犬について調べると、その先祖には絶滅した「石州犬」の名も。ナヌ？石州犬？初めて聞いた。地元で地犬がいたってこと？しかもその中の「石」という犬は「現在の柴犬のルーツ」であると。そんなバカな、でもそれが本当なら途方もない地域のお宝情報だ！

そこで私は本格的に調査を始めた。あらゆる書籍や文献にあたり、専門家へ聞き取り、国会図書館にも通った。得た情報はネットで随時発表した。すると地元大学ではゼミで取り上げ、マスコミにも紹介され、CATV番組も持つことになった。結果「石」の生家や関係者の子孫も次々に見つける事ができた。

そして調査を始めて一年半。私は今や石州犬研究の第一人者となっている(なぜなら石州犬を研究しているのが私だけだから)。

今、地元では「柴犬の聖地・石号の里」で地域起こしという動きが起きている。これぞまさに地域振興バカ冥利につきる。

「のんびりリタイア」の筈の還暦が、ドタバタとまるで狂詩曲のよう。

と、久々に鏡を覗いてみると、そこには若々しいキュートな笑顔があった。

